

埼玉県における二〇世紀初頭の織物商分布

田 村 正 夫

一、はしがき

首都圏の都市成長前線帯には、都市化に伴う商業の発展が顕著に認められるが、一九六〇年代以降の商業発展の基盤には、在来商業地域の性格が関与していたものとみられる。筆者は、先に首都圏の都市成長前線帯における商業地域形成のメカニズムを分析するために、埼玉県毛呂山町及び坂戸市における商店を対象とする聞き取り調査を行って、論述を試みた⁽¹⁾。次いで、首都圏の都市成長前線帯に組み込まれる以前の在来商業地域の性格を問題にした。その結果、埼玉県における二〇世紀初頭の商店分布は、南東部の日用・食料品商を基軸とし、その外側に漸次、身辺細貨品商・家具類商・文化品商・農薬用品商、サービス業、繊維品商の相対的に多い町が、ほぼ配列する圏構造を示していたことを明らかにした⁽²⁾。在来商業地域の変容という視角に立って、首都圏の商業の発展を分析するためには、まず在来商業地域を復原する必要がある。本論文では、繊維品商、特に織物商の取扱品目と経営規模を通じて、埼玉県における在来商業地域の性格を分析する。

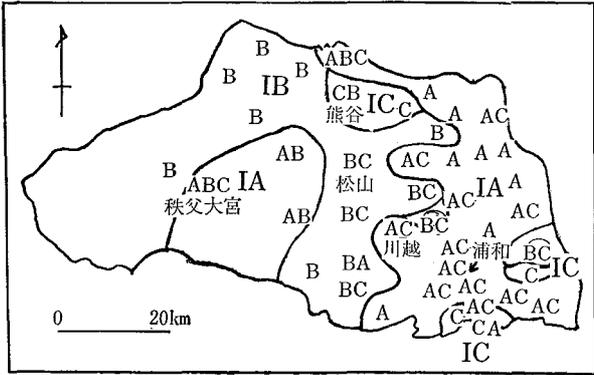
使用する資料は、一九〇二年に、全国営業便覧発行所が刊行した『埼玉県営業便覧』である。その概要は、既報⁽³⁾において述べたので省略するが、埼玉県下四三町(内、妻沼だけは村)における店舗を、この時点で網羅する資料として、注目されよう。

二、繊維品商の分布

繊維品商一五〇二の内、A 織物商(三七%)、B 糸繭商(二六%)、C 足袋商(二〇%)の三者が、八三%を占める。そこで各町における三者の比率を算出した後、上記の構成比率以上を示す品目を町ごとに抽出し、大きい順に配列する。次いで、A・B・Cの各が首位を占める町が分布する範囲を、各一次A区、一次B区、一次C区とする。また、A・B・Cの各が第二位を占める町が分布する範囲を、それぞれ二次A区、二次B区、二次C区とする。さらに、A・B・Cの各が分布するものの、上述の記号配列には表示されない町の分布範囲を、それぞれ三次A区、三次B区、三次C区とする。なお、B・C各が同じ%を示す町を(BCとする(第1・2図))。

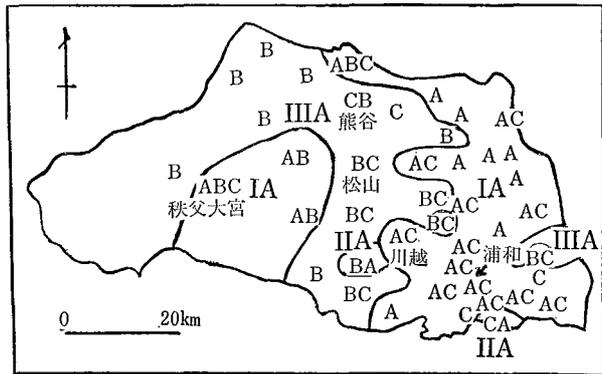
一次A区は、(一) 県東部を南北に連ねる地帯、すなわち、妻沼から加須低地(羽生・加須・菖蒲・久喜・幸手・杉戸)、大宮台地(岩槻・原市・大宮・与野・浦和)、荒川低地東部(志木・蕨・安行・草加)、川越台地の南北両端(川越・所沢)に及ぶ地域と、(二) 外秩父山地縁辺部(秩父大宮・小川・越生)に分布する。一次B区は、(一) 小鹿野・北武蔵台地(本庄・児玉・寄居・深谷)及びその東方の松山・桶川と、(二) 豊岡から入間台地(坂戸・飯能・入間川)にかけて分布し、一次A区の一・二の間には、南北に配列する。これに対して一次C区は、低地に偏在し、(一) 妻沼低地南部(忍・熊谷)と、(二) 県東南端の荒川・中川両低地南部(越ヶ谷・大和田・川口)に分布する。

が強い。いかえれば、足袋商は、県東部を北西〜南東方向に、帯状に卓越する。
 繊維品商立地の町数と店舗数の関係を検討しよう(第1表)。一次A区は、総町数の五六%、織物商数の七四%を占め、広範囲に店舗が集積していて、一次B・C両区と著しく異なるが、一町当たりの店舗数は、一次B区には及ばない。一方、二次A区は、わずかに二町に立地する一二店舗に過ぎず、一町当たりの店舗数も、二次B・C両区と比



(注) A：織物商，B：糸繭商，C：足袋商，記号の配列方法は本文参照。(IA：1次A区，IB：1次B区，IC：1次C区)

第1図 繊維品商の分布(1902)



(注) A：織物商，B：糸繭商，C：足袋商，記号の配列方法は本文参照。<IA：1次A区，IIA：2次A区，IIIA：3次A区>

第2図 織物商の分布区(1902)

(BCは、一次A区・一次B区の境界に位置する上尾と、越ヶ谷に北接する大沢だけである。一次A区の内、北部の加須低地にはA、一次B区の内、同じく北部の小鹿野〜北武蔵台地にはBが多い。そして両地域共に、南するにしたがつて、Cが次ぐ傾向

第1表 繊維品商立地の町数と店舗数 (1902)

	1次区			2次区			3次区			無店舗	計												
	a 町数	b 店舗数	b/a	a 町数	b 店舗数	b/a	a 町数	b 店舗数	b/a		a 町数	b 店舗数	b/a										
A 織物商	24	59	2.46	2	9	4.5	17	28	1.65	0	0	0	43	33	100	559	44	100	13.0				
B 糸繭商	12	29	2.42	5	24	4.8	19	32	1.68	4	83	20.75	7	16	2.29	100	43	33	100	398	32	100	9.3 ⁽¹⁾
C 足袋商	5	12	2.4	14	67	4.79	24	40	1.67	56	137	2.45	0	0	0	43	33	100	303	24	100	7.0	
計	41	100	2.44	21	100	4.76	60	100	1.67	47	353	7.51	7	5	0.71	100	129	100	100	1260	100	100	9.8 ⁽²⁾

(注) a・b欄については、左側：実数、中央：業種構成比(%)、右側：区別構成比(%), (1)・B立地町数当たりでは、11.0、

(2)4捨5入のため99%

べて最少である。

一次B区は、総町数の二八%を占めるに過ぎないが、店舗総数の六二%に及んでおり、一町当たりの店舗数も、一次A・C両区と比べて最大である。もつとも、本庄一町だけで店舗総数の二七% (一〇八店舗) を占めるから、これを除くと、一次C区と同じく二二・六となる。二次B区は、町数・店舗数共に二次A・C両区の間であるが、一町当たりの店舗数は、両者をはるかに凌いで、最も多い。これに対して三次B区は、町数の総数に対する比率に比べて、店舗数のそれが低く、一町当たりの店舗数は最少である。糸繭商だけは、県東南端に、その立地をみない七町

第2表 繊維品商の規模 (1902)

	A 織物商				B 糸繭商				C 足袋商				計
	1次区 A	2次区 A	3次区 A	小計	1次区 B	2次区 B	3次区 B	小計	1次区 C	2次区 C	3次区 C	小計	
大型商	(61) 253	(25) 3	(53) 70	(58) 326	(13) 32	(29) 20	(20) 17	(17) 69	(30) 19	(18) 19	(23) 32	(23) 70	(37) 465
小型商	(39) 161	(75) 9	(47) 63	(42) 233	(87) 215	(71) 48	(80) 66	(83) 329	(70) 44	(82) 84	(77) 105	(77) 233	(63) 795
計	(100) 414	(100) 12	(100) 133	(100) 559	(100) 247	(100) 68	(100) 83	(100) 398	(100) 63	(100) 103	(100) 137	(100) 303	(100) 1,260

(注) ()=%, 大型商・小型商区分は本文参照

(全町数の一六%)があり、顕著な生産地商業であったことを示している。
 一次C区は、総町数の一二%、店舗総数の二二%を占めるに過ぎず、一町当りの店舗数も、一次A・B両区と比べて最も少ない。二次C区、三次C区となるにしがって、町数・店舗数の比率が高まるが、一町当りの店舗数は、二・三両次のA・B各地区の中間を示す。

全県の一町当たりの店舗数は、織物商・糸繭商・足袋商の順であるが、糸繭商を立地町数当たりで計算すると一・〇となり、織物・糸繭両商と足袋商の格差が大きい。

『営業便覧』に大型活字で掲載されている店舗は、掲載料をより多く支出したと思われ、広告を重んじた店舗とみられる。これをもって、営業規模が大きいものと断ずることはできないが、営業規模を推察し得る資料に乏しいので、一応、大型の店舗と解し、さらに買継商・仲買商・卸商・問屋を含めて、大型商とする。また、これらを除く一般の小型活字掲載店舗を、小型商とする。なお、織物商を、① 絹・綿織商、② 絹織商、③ 綿織商に分類して考察する(第2・3表)。

大型商が五八%を占める織物商(5)に対して、小型商が八三%を占める糸繭商が対照的であり、足袋商もその七七%が小型商である。しかし、織物商を分布

第3表 織物商 (1902)

区	種別	大型商				小型商				計	区	種別	大型商				小型商				計
		①	②	③	計	①	②	③	計				①	②	③	計	①	②	③	計	
一次区	川越	17	3	9	29	8	8	4	20	49	二次区	入間川	2		2	7	1		8	10	
	加須	4	1	26	31	3	1	9	13	44	川口	1		1		1		1	2		
	久喜	3	1	15	19		1	11	12	31	小計			(25)			(75)	(100)			
	所沢	14			14	4	7		11	25	熊谷	11	1	12	4	3	7		19		
	小川	4	5		9	2	11	2	15	24	忍	6		7	13	1	1	3	5	18	
	幸手	3	1	12	16	2	1	4	7	23	騎西	2		2	2	2	7	11	13		
	羽生	2	1	13	16	1	3	2	6	22	深谷	2	1	1	4	5	4	9	13		
	鴻巣	2		6	8	2	1	10	13	21	小鹿野	5	1	1	7	3	3		6	13	
	鳩ヶ谷	14	1	4	19	2			2	21	一本庄	5	1	2	8	3		3	11		
	越生	3	8		11	2	7		9	20	飯能	3	5		8	2		2	10		
	浦和	4		3	7	7	2		9	16	越ヶ谷	3		1	4	3			3	7	
	杉戸	1	2	5	8	2	5		7	15	児玉						6	6	6		
	岩槻	3	1	6	10	2	2		4	14	寄居	3			3	2	2		5		
	菖蒲	1	2	2	5	2	6		8	13	松山	1		1	4	4		4	5		
	株交大宮	7	1		8	1	2		3	11	坂戸		1	1	3	3		3	4		
	蕨	10		1	11					11	豊岡	2	1		3				3		
	草加	1	4		5	5	5		5	10	桶川	2		1	3				3		
	大宮	2	1	1	4	4	4		4	8	大沢	2					1	1	1		
	粕壁	2	3	2	7	1	1		1	8	大和田						1	1	1		
	与野	4			4	2	2		2	6	上尾	1		1					1		
志木	1	3		4	1	1		2	6	小計			(53)			(47)	(100)				
妻沼	1		2	3		3		3	6	二次区	46	11	13	70	13	33	17	63	133		
原市			1	1	1	3		2	5	三次区			(50)			(50)	(100)				
栗橋	3	1	4	1		1		1	5	A区	49	11	13	73	20	35	17	72	145		
小計			(61)		(39)	(100)		414	5	総計			(58)			(42)	(100)				
		99	44	110	255	36	62	63	161	414		148	55	123	326	56	97	80	233	559	

(注) 大型商・小型商区分は本文参照, () = %

①絹・綿織商 ②絹織商 ③綿織商

区ごとにとみると、一次区においては前述の傾向が強く（大型商対小型商の比はほぼ三対二）、二次A区ではその逆（同比は一對三）であり、三次A区あるいは二・三両次区合計では、大型商・小型商がほぼ相半ばする。これに対して、糸織商の小型商比率は、一次B区で七八%、二次B区で七一%、三

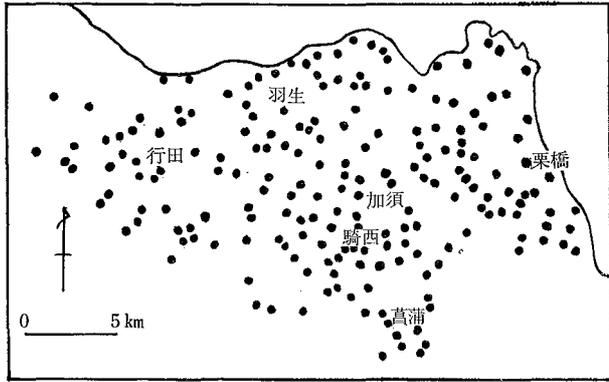
次B区で八〇%、足袋商のそれは、一次C区で七〇%、二次C区で八二%、三次C区で七七%と、いずれも高率である。

三、一次A区

(一) 北東部

一次A区において、大型商数が小型商数を越える一六町(6)の内、綿織商数が絹・綿織、絹織両商合計数を越えるのは、加須低地のほとんど中川低地北部・岩槻台地に及ぶ加須・久喜・幸手・羽生・杉戸・岩槻の六町に限られ、この六町だけで、同区大型綿織商数の七〇%を占める。これらはすべてAである。また、綿織商数が絹・綿織、絹織両商合計数を越えるのは大型商数だけで小型商数についてはその限りではない羽生・岩槻を除くと、外の四町は、大型・小型両商共、いずれも綿織商数が絹・綿織、絹織両商合計数を上回っている。さらに、絹織商数と絹・綿織商数を比較すると、後者の方が多いのは、羽生と杉戸だけである。いいかえれば、県北東部において、奥州街道、日光御成街道並びに脇街道に面し、元荒川・会の川・葛西用水・見沼代用水などに臨み水運に恵まれた集落が、北西へ南東方向に直線状に並ぶ大型綿織商地域とみられる。ここには、比較的大規模な生産地買継問屋が集まっていたのである。かくて、東武鉄道の杉戸・久喜両駅が一八九九年、加須駅が一九〇二年、羽生駅が翌年に開設された(7)。

この六町における綿織商数を比較すると、北方の加須・羽生には青縞商、南方の久喜・幸手・杉戸・岩槻には白木綿商が多い。一八九六年の戸数は、加須六一二に対して羽生五六〇であり(8)、加須には、埼玉木綿織物産盛同業組合(9)の事務所があった。同組合加入一九五町村の分布は第3図の通りであって、品質管理の立場から、木綿織物取引の場



第3図 木綿織物産盛組合加入195町村の分布 (1887)

所が製造者居宅・市場・自宅の三方所に限定されていた¹⁰⁾。したがって生産地商業が、経済地域的な枠(わく)組みの中で営まれていたのである。一方、組合運営費が木綿織物貼用の用紙代をもってしても不足する場合、木綿織物商だけに課されていた信認金額(一等七五円、二等五〇円、三等三五円、四等二五円、五等一〇円、六等五円)に対してだけ賦課されていた¹¹⁾。つまり、この組合の構成員は、染物屋を含む木綿織物製造者と織物商であった¹²⁾が、組合運営のイニシアチブをとっていたのは、織物商であったものとみられる。その輸送路としては、吹上川俣道・熊谷久喜道・鴻巣加須道などが利用されていた¹³⁾。

加須は「青縞の本場にして五十の日を以て市を開く、所謂買継市にして、その日は、近郊の婦女、織りための布を負うて黎明より群集¹⁴⁾」し、大型綿織商二六の内、本場青縞買継商一一、同買継問屋七、同仲買商・同仲買白木綿薄花中形商・同糸足袋商・青縞買継商・木綿青縞仲買木綿薄花中形商各一に達し、この外には、白木綿問屋・同綿系染糸蘭生糸商・短衣製造本舗各一を数えるに過ぎない。これに対して、「木綿織はことに隆盛にして、毎月四・九の市日に集まる青縞は二万反以上に達¹⁵⁾」したといわれる羽生の大型綿織商は、青縞買継問屋五、同買継商四、同問屋一、計一三であり、加須の半数である。小型綿織商内の青縞商も、加須六に対して羽生二であり、加須では、さらに太物商二、白木綿商一がある。

大型及び小型の絹・綿織商数も、加須は羽生を凌いでいる(16)。しかし、大型絹織商は、加須の一店は呉服商、羽生の一店では唐物商と記され、さらに小型の呉服商にいたっては、加須一に対して、羽生三である。すなわち、両町の人口は共に三・八千であるが、加須では、青綿商を主体とし、白木綿・薄花中形・綿糸・染糸・繭・生糸・短衣までも取扱う大型・小型商が営業していたのに対し、羽生では、青綿商だけで白木綿商はなく、大型・小型両商数共、加須には及ばなかった。しかも羽生では、呉服商が加須に比べて零細であり、大型の呉服商に代わって、唐物商の看板を掲げていたものとみられる。

久喜・幸手・杉戸・岩槻における大型綿織商としては、白木綿商が久喜八(内、篠津村一)・幸手及び岩槻共に六・杉戸三、白木綿糸繭商・白木綿醬油商が久喜・幸手共に二(内、白木綿糸繭商一は篠津村)、この外に久喜に木綿商二(篠津村)・白木綿買継商一、幸手に白木綿石材炭商・埼玉県白木綿問屋各一、杉戸に物産木綿買入商・白木綿買入商各一がみられる。また小型綿織商としては、白木綿商が久喜九・幸手四・杉戸三・岩槻二、この外に白木綿酒醬油穀商・木綿荒物商各一が久喜に、物産木綿買入商・白木綿買入商各一が杉戸に分布する。忍・熊谷の足袋商地域(一次C区)に最も近かった久喜に白木綿商が多く、幸手・杉戸と離れるにしたがって、その数を減ずる。遠方に位置する岩槻・杉戸では、白木綿商専業であるのに対して、久喜・幸手の大型綿織商の中には、糸繭商・醬油商をも兼ねる店舗もある。絹織商としては、大型呉服商が杉戸二(内、一は荒物商を兼ねる)、久喜・幸手・岩槻各一、小型呉服商が杉戸・岩槻各二、久喜一である。人口の最も多かった幸手(五・七千)では、大型・小型の絹・綿織商、小型呉服商に代わって、唐物商の名が見え(17)、人口の最も少なかった久喜(二・八千)には、糸繭・酒・醬油・穀物荒物各商をも兼ねる方(よろず)屋形態がうかがわれ、南方の篠津村にも、その分布が拡大されていたことが分か

る。久喜の大型商は、呉服商と木綿商（篠津村）Yが共に、多額の納税者であった¹⁹。これに対し、久喜・杉戸（人口四・二千）には見られない唐物商の幸手における立地は、小売商勢の優位を示唆する。六町の内、人口が最も多く（六・七千）、城下町兼宿場町起源の市場町岩槻では、大型白木商K・F・Si、大型呉服太物商Sa・Nが、共に高額の納税者であった¹⁹。

(二) 中央部

一次A区において、小型商数が大型商数越える町は、小川・鴻巣・菖蒲・原市・浦和の五町であり、県央の台地上を北西〜南東方向に分布し、同区小型商数の三〇%を占める。これらの内、絹・綿織、絹織両商合計数が綿織商数を越えるのは、西方の小川と南方の浦和であり、他の三町では逆であって、前述(一)の西南に接する大宮台地上に分布する。すなわち、初期の綿作を背景として成立した綿織物生産の中心地域であった北埼玉郡²⁰に、比較的大規模な綿織商が立地し、小規模な綿織商地域が西接していたのである。

浦和(AC)の大型商は、織物・反物の両仲買商各三・呉服太物商一、また小型商は、織物商五、呉服太物・呉服両商各二である。これに対して、小川(AB)の大型商は、生絹太織買継商二、生絹商・同系織商・生絹及び学校用具商・織物商・呉服太物商・呉服太物足袋洋物時計商・織物及び箆筒夜着祝い物一式商各一、また小型商は、絹商八、織物商二、絹煙草商・絹飲食商・呉服商・太物商・太物楮商各一である。浦和には大型絹織商・小型綿織商、小川には大型綿織商のそれぞれの専業がなく、織物商としてほぼ一括されていたわけである。人口六・八千の浦和が、反物仲買をも含む消費中心地的性格を示すのに対して、人口七・五千の小川が、絹取引の多い生産地商業の拠点的性格を表わしている。菖蒲はAであり、中山道沿いの鴻巣と上尾東方の原市はACである。菖蒲では、綿織商数が絹・綿織、絹織

両商合計数を越えるのは小型商だけで、大型商についてはその逆である。鴻巣と原市は、大型・小型両商共、綿織商数が絹・綿織、絹織両商合計数を上回っている。また、絹・綿織商数と絹織商数を比較すると、前者の方が多いのは、中山道沿いの浦和・鴻巣だけであり、他の三町では、後者の方が多かった。

鴻巣には、小川・浦和と同じく小型絹・綿織商があり、小型絹織商は唐物商であって、小型白木綿商六・同太物商四は、それぞれ五町の内、最も多い。また、白木綿と共に機道具一式も販売する小型商も立地する。なお大型綿織商として、白木綿商三の外、白木綿買継問屋・太物商・小間物白木綿商各一、さらに大型絹・綿織商としては、呉服太物・織物各商一がみられる。浦和同様、宿場町兼市場町起源であり、いち早く日本鉄道中山道線の駅が開設されたなどの事情のために、菖蒲・原市に比べて商品構成の多様化が進んでいたのである。織物商数は人口規模に応じており、鴻巣（五・五千）に次いで、菖蒲（四・五千）の大型商は呉服商二、呉服太物・白木綿・白木綿買継商各一、同じく小型商は木綿商六、原市（二千）の大型商は白木綿商一、同じく小型商は白木綿商三、呉服茶商一である。

(三) 南部

一次A区において、大型商数が小型商数を越える一六町の内、絹・綿織、絹織両商合計数が綿織商数を越える一〇町（栗橋・粕壁・川越・鳩ヶ谷・志木・与野・蕨・所沢・越生・秩父大宮）は、前述(一)・(二)を取り巻いており、栗橋を除けば、それ以南の地域に東西にわたって分布する。これらは、越生がAB、秩父大宮がABCである外は、すべてACである。絹・綿織商数と絹織商数を比較すると、後者の方が多いのは、西方の秩父大宮・越生と、東方の志木・粕壁だけであり、他の六町では、前者の方が多い。

これらの内、小型商が全くないのは、一〇町中唯一の中山道の宿場町起源の町、蕨である。ここでは、大型商の中

で、織物仲買商七^二、織物買継商・織物製造商・呉服太物唐物商各一が主体をなし、綿織商は双子類問屋一だけである。六・一千の人口をもつ蔵において、絹・綿織物を対象とした東京指向型商業が盛んであったことを示唆している。小型太物商は、川越四と秩父大宮二を数えるに過ぎない。川越におけるこの外の小型商は、織物商・呉服商共に八、大型商は、呉服太物商六、織物仲買商四、織物商・同卸商・同問屋・同仲買商・同製造仲買商・呉服太物卸商・呉服太物照降商各一に達し、さらに呉服商二・綾製造販売商一の外、太物商五、同卸商二、同問屋一、綿布製造販売金銭貸付業一に及ぶ。いいかえれば、人口二・六万を擁し、新河岸の舟運と川越街道を背景に成長した城下町起源の町、川越では、小売りから卸にいたる全織物類が取扱われており、生産・流通・消費の各側面を反映する拠点都市的な特徴がみられる⁽²²⁾。これに対して、人口三・九千の秩父大宮には、大型商は、本場秩父縞生絹買継商二、絹太織買継商・呉服荒物酒類度量衡商呉服商各一、呉服荒物商・呉服荒物穀商各一(両商だけは野上村)、菓種売菓太物商一(皆野村)、小型商は、先の太物商の外に、呉服太物荒物酒造商一があるに過ぎない。すなわち、秩父大宮における小型太物商の分布が、消費の一中心地たることを物語っているものの、秩父織物を背景とする商業の拠点性は、きわめて稀薄であったことを示している。かくて、数kmから十数km下流の皆野・野上両村における万屋的営業形態がみられたのである。

小型商が絹・綿織商だけであるのは、鳩ヶ谷と栗橋である。両町の人口規模はほぼ同じであった(前者三・三千人、後者三千人)が、かつては日光御成街道に面して江戸に近接する地の利を得ていた宿場町兼市場町起源の鳩ヶ谷と、奥州街道の宿場町・渡船場兼市場町としての起源をもつものの、東京都心部から数十kmも隔たっていた栗橋とは、織物商の数と種類が、次のように著しく異なっている。大型商についてみよう。鳩ヶ谷では買継商が多く、織物

買継商八・同買継菓子商・同買継菓子蚊屋布団商各一、木綿織物買継商三、計一二を数える。また、呉服太物商は鳩ヶ谷に四、栗橋に二であるが、この内には、鳩ヶ谷では古着商、栗橋では生糸商、和糸商をそれぞれ兼ねるものが各一含まれる。さらに鳩ヶ谷における小倉帯地商・呉服商各一に対して、栗橋では、白木綿本場青縞生糸商一があげられる。小型商では、両町共、呉服太物商一があるが、鳩ヶ谷では、さらに織物商一もみられる。いいかえれば、鳩ヶ谷では、栗橋におけるよりも、より一層付加価値の高い織物類が取扱われていたのである。

小型商としては呉服商だけしかみられないのは、粕壁と与野である。奥州街道の宿場町であり、市場町の基盤もあり、舟運に恵まれていた粕壁は、人口六・七千人を擁していた。これに対して、中世には鎌倉街道に沿っていたものの、近世には川越・浦和を結ぶ脇往還の街村に過ぎなかった与野の人口は、四・八千であった。ところが、大型綿織商では、両町共、呉服太物商二があげられたあと、与野ではさらに織物仲買商二もみえる。また小型呉服商は、粕壁一に対して与野二である。これらは、与野が粕壁よりも、東京都心部に近かったことによるものとみられる。一方、粕壁において、大型呉服商三の立地は、局的消費市場を背景とする商業の大型化を、また白木綿商・埼玉物産木綿買継商各一の立地は、生産地商業の趨勢を示唆する。これは、呉服商Nと埼玉物産木綿買継商Sが、共に多額の納税者であったこと⁽²³⁾からもうかがえる。

絹・綿織商と絹織商は立地するが綿織商がなかったのは、所沢・志木・越生の三町である⁽²⁴⁾。大型商の内、絹・綿織商は、越生三に対して所沢・志木各一であるが、越生三の内には、生絹買継商との兼業と雑貨商との兼業が各一含まれる。ところが、所沢では、織物仲買商九、織物問屋二、織物商・同仲買商金銭貸付業・呉服太物商各一、計一四がみられる。所沢は、江戸に近い脇往還に面する宿場町兼市場起源の町として、三町の内で最も人口が多く(五・

五千入)、織物の流通の中心をなしていたことが分かる。この外の大商としては、生絹で知られた溪口集落越生²⁵⁾に、生絹仲買商四、生絹質商・生絹生系依託販売商・東京三井出張生絹買継商各一があるのに対して、新河岸の舟運に依拠した市場町起源の志木には、呉服商三があるに過ぎない。小型の呉服太物商をみると、越生二に対して所沢・志木各一であるが、所沢にはさらに小型織物商三がある。また小型呉服商は、所沢七に対して、志木・越生共に一であるが、越生には生絹商六があり、この内、照降商との兼業が一、煙草商との兼業が一である。越生と志木の人口規模はほぼ等しい(共に三千)が、前者が特に生絹産地取引の中心をなしていたのである。

一次A区において、大商商数と小商商数が等しいのは、大宮・草加・妻沼の三町であり、この内、大型・小型両商共、絹・綿織、絹織両商合計数が綿織商数を越えるのは、県南に位置するACの大宮・草加であり、県北の妻沼(AB)は、この逆である。この三町の織物商数は比較的少なく、また絹・綿織商数と絹織商数を比較すると、前者の方が多いのは、妻沼だけである。脇往還の宿場町と市場町、そして河岸場を起源とする妻沼(人口二・四千)では、織物商はすべて太物商であり、大商商三はそれぞれ呉服・材木、荒物、唐物各商を兼ねており、小商商三の内、二は洋物、荒物・質物をそれぞれ兼ねる。人口六・五千の大宮は中山道、五・一千の草加は奥州街道のそれぞれ宿場町及び市場町の起源をもっていた。呉服商の内、大商商は草加四、大宮一であり、小商商も草加五(雑呉服商一を含む)に対して大宮四であって、草加の方が多い。しかし、大型織物商は、大宮における織物仲買商・織物買継商・双子織物仲買商各一に対して、草加では、織物系商一があったに過ぎない。つまり、東京に近い草加では大小の呉服商が主となり、やや遠ざかった大宮では産地立地の大型織物商が目立ち、さらに最も遠い妻沼では産地立地の太物商が、万屋形式で営まれていたのである。

四、二次A区

二次A区は、小型商数が大型商数を越える入間川(A_B)と、両者が同数の川口(C_A)であり、共に綿織商の分布がみられない。大型呉服太物商は、入間川二、川口一であるが、入間川の二は唐物商を兼ねる。小型商としては、両町共、呉服商が一つあるが、入間川では、さらに織物商五、呉服太物商・呉服太物煙草商各一もみられる。両町の人口規模はほぼ等しい(入間川五千、川口五・二千)が、東京に近い荒川河岸の渡船場並びに日光御成街道の宿場町及び市場としての起源をもつ川口は、入間川に比べて業種構成が単純であり、この傾向は、特に小型商において著しい。これに対して筏宿(26)で知られた入間川は、甲州裏街道と日光脇往還の交叉(さ)点に位置する宿場町を起源とし、西武川越線の駅を利用し得る市場町(27)であって、特に小型織物商数の多かった点が注目される。

五、三次A区

三次A区において、大型商数が小型商数を越える町は、熊谷・忍・小鹿野・本庄・飯能・越ヶ谷・寄居・豊岡・桶川・上尾の一〇町であり、反対に小型商数が大型商数を上回る町は、深谷・騎西・児玉・松山・坂戸・大沢・大和田の七町である。前者と後者の店舗数の割合は、ほぼ七対三であり、大型商が大きなウェイトを占めていたことが分かる。

(一) 西部

前述一〇町の内小鹿野・本庄・飯能・寄居の四町と、同じく七町の内深谷・騎西(28)・児玉の三町は、Bである。

前者は、県西部を南北に連なり、後者は、県北部を東西にわたって分布する。

前者における大型商をみると、絹・綿織商については、呉服太物商数が、小鹿野五、本庄四、寄居三であるが、小鹿野の四は、それぞれ洋物商、穀・荒物・木炭商、洋物・荒物商、質商を兼ね、さらに後三者が下吉田村に立地する。また、本庄の二は洋織物商、衡器商、寄居の一は唐系紙類洋傘商を、それぞれ兼ねる。しかし、飯能だけは、織物買織商三（内、二は織物以外の「物産」も仲介）である。絹織商については、飯能の呉服商四・絹七子仲買商一の外は、本庄・小鹿野の生絹買織商一がみられ、本庄では太織の買継及び染絹商、小鹿野では糸繭商を、それぞれ兼ねる。太物商は大型商に限られ、本庄二（内、一は洋物商を兼ねる）、小鹿野一（下吉田村に立地し、荒物・穀・木炭商を兼ねる）だけである。小型商をみると、呉服商が本庄・小鹿野各三、飯能二である外、絹商が寄居に二（内、一は繭・木炭商を兼ねる）、呉服太物商が小鹿野に二を数えるに過ぎない。

すなわち、本庄織物で知られると共に、四町の中でも人口が多く（八・九千）、その上、中山道の宿場町起源をもつ市場町であって、日本鉄道中山道線の駅を利用し得た本庄には、大型絹・綿織商が多く、また大型綿織商も立地していた。本庄は「神流川（烏川の支流）が堆積した扇状地がつくる洪積台地の上にあり、すぐ北側は急崖をもって利根川氾濫原に臨⁽²⁸⁾」み、他の三町も、いずれも谷口に位置する。本庄に次ぐ人口（六・二千）を擁し、西川材取引の中心地であった飯能は、飯能絹の生産や青梅縞・絹太織取引で知られた市場町であり、中山道裏道・中山道往来・秩父裏道・秩父往来・江戸往来・八王子往来・甲州脇道⁽³⁰⁾に面する交通の要衝であった。したがって、大型の織物買継商や大型の呉服商が多かったのである。赤平川の河岸段丘上に位置し、盆地内において秩父大宮に次ぐといわれた谷口の商業町小鹿野（人口四・二千）は、秩父往還の一ターミナルであり、秩父大宮が、秩父往還と甲州裏道の分

岐点に当たっていたのとは、著しく異なっていた。このため、小型の呉服太物商・呉服商が多く、これらの商品は、約一〇km下流の下吉田における大型万屋店舗でも売られていたのである。秩父・児玉両往還が交叉する宿場町起源の市場町寄居は、上武線のターミナルではあったが、人口は最も少なかった(三・八千)。したがって、四町の中で、大型商数が最も少なく、小型絹商の立地を特色とする。

前述の深谷・騎西・児玉三町の大型商をみると、呉服太物商が、騎西・深谷に各二(騎西の一は染物商を兼ねる)ある外は、深谷に生絹太織買継商兼染絹商・太物商各一がみられる。小型商をみると、絹・綿織商では、織物商が騎西の二だけであり、絹織商では、呉服商が児玉六、騎西二、深谷一であり、この外深谷に絹商二、唐物商・生絹商各一がある。綿織商は、深谷における太物商四、騎西における木綿商五(内、三は織物商、古着商、糸繭商をそれぞれ兼ねる)、白木綿商二である。すなわち、深谷は、日本鉄道中山道線の駅をもち、中山道の宿場町を起源とする市場町として、人口七・一千を擁するため、大型商数が多く、太物商、絹商、生絹商、唐物商、あるいは生絹太織買継商などの立地を特色とする。騎西絹で知られた市場町騎西は、人口が少ない(二・六千)が、店舗は深谷と同数あり、小型の綿織商数が、小型の絹・綿織商、絹織商合計数を越えていた点が、注目されよう。これに対して、児玉往還の宿場町起源をもつ市場町児玉は、人口四・四千を数える溪口集落であるが、小型呉服商だけしかみられなかったのである。

(二) 東部

三次A区の中で一次C区に属するのは、大型商数が小型商数を越える町内の熊谷・忍・越ヶ谷であり、小型商数の方が多い町内では、大和田だけである。この四町は県北と県南に偏在し、熊谷がCBである外は、すべてCである。

三町の大型商をみると、絹・綿織商としては、呉服太物商が、熊谷八（内、三は洋傘商を兼ねる）、忍六、越ヶ谷三であり、さらに熊谷に、絹太織本場青縞買継商・絹太物染絹卸商・織物商各一が分布する。また綿織商は、忍における青縞卸商二、青縞商・本場青縞卸商・本場青縞卸織底白木綿肥料商・青縞買継足袋地類問屋・布織製造商兼小間物商各一と、越ヶ谷の木綿問屋一であり、絹織商は、熊谷の絹大織買継商一だけである。小型商をみると、絹・綿織商としては、呉服太物商が越ヶ谷三、忍一であり、熊谷に織物商四がある。また綿織商としては、太物商が熊谷三、忍一である外、忍には青縞商二があり、絹織商は、忍の呉服商一だけである。大和田には、小型呉服商一がみられるに過ぎない。いいかえれば、川越に次ぐ人口を数え（一五・三千）、すでに一八八八年、人力車数が最も多かった⁽³⁾熊谷は、中山道と秩父往還の分岐点に当たる宿場町起源の市場町であり、日本鉄道中山道線と上武線の分岐点に位置し、大型商では各種の絹・綿織商、小型商では織物商・太物商が、圧倒的に多かった。城下町と共に日光裏街道・忍栗橋道・忍幸手道の宿場町を起源とする足袋の町忍の場合、人口は熊谷のほぼ半ばであった（八・三千）が、青縞商や呉服太物商の立地が目立つ。越ヶ谷と大和田の人口はほぼ等しかった（前者三・七千、後三・九千）が、前者は、水運に恵まれた上、東武線大沢駅に近く、奥州街道の宿場町起源の市場町であり、呉服太物商が多かったのに対して、川越街道の宿場町起源であった後者には、小型服商一しかみられなかったのである。

三次A区の中で、大型商数が小型商数を越える町内の豊岡・桶川、小型商数の方が多い町内の松山・坂戸の計四町は、BCである。前二者は大型商数だけであり、両町共、呉服太物商・織物問屋各一があるが、豊岡の呉服太物商は荒物商を兼ねている上、桶川の白木綿問屋一に対して、豊岡は呉服荒物酒類商一となっている。後二者の大型商は、松山では呉服太物商、坂戸では呉服商であり、小型商は、呉服商が松山四、坂戸二であるが、坂戸には絹製造商一も

みられる。いかえれば、豊岡は、県南にあつて入間川の支流霞川に臨み、日光脇往還の宿場町を起源とする市場町であり、また桶川は、県央よりもやや東方にあつて、日本鉄道中山道線の駅をもち、中山道の宿場町を起源とする市場町であり、人口はほぼ同じ(豊岡三・九千、桶川三・五千)で、松山・坂戸とは異なり、共に大型商だけであつた。しかし、豊岡における荒物商・酒類商との兼業は、消費面にみられる結節機能を反映するのに対して、桶川における白木綿問屋の立地は、生産面の結節機能を示唆する点が異なっている。松山・坂戸は、共に県央にあり、日光脇往還の宿場町起源をもつ市場町であつたが、中世の城下町に由来する都市的発達をみて熊谷往還の宿場町をも兼ねていた松山の人口は、おもに近世以降の発展を示したとみられる坂戸の約二倍であつた(松山六・三千、坂戸三・四千)。したがつて、松山は、坂戸よりも小型呉服商数が多く、大型商は、坂戸の呉服商に対して呉服太物商となつてゐる。上尾と大沢は共に(BC)であるが、日本鉄道中山道線の駅をもち、中山道の宿場町起源の市場町であつた上尾(人口三千)は、大型呉服商一、越ヶ谷宿の合宿(註)としての起源をもつ大沢(人口二・四千)は、前述の大和田と同様に、小型呉服商一であつた。

六、結 び

(一) 埼玉県における二〇世紀初頭の織維品商は、東から西へほぼ織物商地域、足袋商地域、糸繭商地域の順に配列し、特に織物商の卓越する町が多い。また織物商は、他の二者に比べて、営業規模が大きい。

(二) 一次A区では、加須及びこれに次ぐ羽生を含む青絹商地域と、久喜・幸手・杉戸・岩槻の白木綿商地域が、北東部の大型商地域を形成し、その西南に、県央の台地上を北西へ南東方向に分布する小型綿織商地域(鴻巣・菖蒲・原

市)、小型絹ないし絹・綿織商地域(小川・浦和)がみられる。さらに、これらを取り巻いて、大型絹織商地域(秩父大宮・越生・志木・粕壁)、大型絹・綿織商地域(川越・鳩ヶ谷・与野・蕨・所沢・栗橋)、大型商・小型商のいずれにも片寄らない絹・綿織商地域(大宮・草加)並びに綿織商地域(妻沼)が分布する。なお、特に川越においては、織物業種及び経営規模の多様化による拠点都市的な特徴がみられ、蕨・鳩ヶ谷・与野・所沢・草加では、東京指向型の織物商が多い。

(三) 二次A区には綿織商がなく、小型商の多い入間川の方が、大型商・小型商のいずれにも片寄らない川口よりも、業種構成が多様化している。

(四) 三次A区では、西部において、谷口的大型絹・綿織商地域(小鹿野・本庄・寄居・飯能)が南北方向に、小型絹織商及び小型綿織商地域(児玉・深谷・騎西)が北方を東西方向に分布する。また東部においては、BCに属する大型商地域(豊岡・桶川)、大型・小型の絹・綿織商及び絹織商地域(松山・坂戸)、(BC)に属する少数呉服商地域(上尾・大沢)が中央を占め、一次C区に属する亜川越的拠点都市熊谷、青鞜商・呉服太物商の目立つ忍・越ヶ谷、小型の少数呉服商地域大和田が、これを取り巻く。

以上のように、埼玉県における二〇世紀初頭の織物商の分布は、交通史的背景、生産及び消費構造、人口規模、首都東京の社会経済的影響などを反映して立地していたのである。

注

- (1) 田村正夫(一九七六)『商業地域の形成』文化書房博文社
 (2) 田村正夫(一九七六)『首都圏の都市成長前線帯における商業地域の形成——埼玉県坂戸町「きどそと」を中心に——』

城西経済学会誌、一二、一〇三、一〇三―一〇四頁

(3) (2)

(4) 『営業便覧』掲載の略図は、正確な縮尺に基づいて作成されたものではないので、これをそのまま事実であると考えることはできないとしても、大型商の間口が、小型商のそのほぼ二倍に描かれている。

(5) 一般に、織物商が大型化していたことは、坂戸町「きどうち」内のK不動産会社社長が「巨富を積む近道は呉服屋か穀屋になることだ」と思い立って、一九五五―六〇年にF衣料品会社に勤務したと回顧していること(一)九三―九四頁)と符合する。

(6) 第三表参照

(7) これより先、一八八五年、久喜には日本鉄道の駅が設けられていた。一八八七年度の道路については、騎西の青縞が鴻巣―松山道を通じて運ばれた外、吹上―川俣道、熊谷―久喜道も青縞輸送に使われていた(羽生市史編集委員会ハ一九七五V『羽生市史』下、三六二―三頁)。鉄道ブーム時代の一八九五年、日本鉄道(千住―栗橋)と東武鉄道(本所―足利)が敷設を競合した際、久喜・羽生・加須から、東武鉄道敷設陳情書が出された。その敷設理由の一つとして、加須・羽生の青縞、久喜・越ヶ谷の白木綿の輸送があげられている(東武鉄道株式会社ハ一九六四V『東武鉄道六十五年史』一三七頁)。もっとも、古利根川の舟運や馬車運送に比べると輸送費が高み、加うるに一車未滿の貨物は、北千住・久喜における積み換えの不便があった。そこで一九〇〇年二月、貨物運賃の割引き特約、馬車運送業者との申し合わせを行った(同書、三二―三三頁)。なお、幸手駅(現東武日光線)の開設は一九二九年であったから、幸手近在で生産された織物の鉄道輸送は、久しく久喜駅を経由していたものとみられる。

(8) 北埼玉郡役所(一九二二)『北埼玉郡史』複製版ハ一九六九V二六頁。なお、一九〇二年の戸数は、加須八三一に対して羽生一、一九七と逆転した。

(9) この組合は、一八八六年に創設され、一九〇〇年、組合法に基づく同業組合となった(ハ(8)三二二頁V)。

(10) 一八八七年七月制定の木綿織物産盛組合規約第二条による(羽生市史編集委員会ハ一九七五V『羽生市史』下、三〇二―三頁)。

(11) (10)第一八・一九兩条による。

- (12) (10) 第一条による。
- (13) (10) 三六二(三頁)
- (14) 全国営業便覧発行所(一九〇二)『埼玉県営業便覧』四〇頁
- (15) (14) 四二頁
- (16) 大型呉服太物商は、加須・羽生共に二であったが、加須ではさらに呉服太物京都染物取次商二もみられ、小型太物商も加須三に対して、羽生二である。
- (17) 絹・綿織商としては、大型の呉服太物・同卸小売・唐物太物各商一、小型の唐物太物・織物各商一、小型呉服商としては、唐物商一が記載されている。
- (18) 一八九七年の所得税下調査簿によれば、反別ⅡE九八・〇二五反、Y一三四・〇一三反、地租ⅡE一〇八・三七九円、Y一〇七・九九一円、軍債ⅡE一〇〇円、Y三〇〇円、Eの木綿売上額四三五四円、Yの白木綿所得一五〇円であった(越ヶ谷市役所ハ一九七四V『越ヶ谷市史』五、一二七・一二九頁)。
- (19) 一八九七年の所得税下調査簿によれば、反別ⅡK二四・一〇四反、F二二〇・九三九反、Si二七・八二二反、Saなし、N三〇・二一二反、地租ⅡK一八・三五八円、F一九一・三三三円、Si三〇・〇二五円、Sa五七六・四五〇円、N三三・〇七九円、軍債ⅡK五〇円、Fなし、Si三五〇円、Sa七〇〇円、Nなし、貸金ⅡKなし、F五、六五〇円、Si一、二〇〇円、Sa一、八五〇円、Nなし、Kの織物一八、〇〇〇円、貸家三ヶ所、Fの織物七二、五〇〇円・貸家なし、Siの木綿一七、三二二円、貸家三ヶ所、Saの織物一四、八七五円、貸家所得一〇〇円、Nの織物八、七二〇円・貸家二ヶ所であった(18)一二三(四頁)。
- (20) 一九〇〇(二年)には、北埼玉郡が、各郡の綿織物生産の首位であった(上野和彦・榊原忠彦ハ一九七五V関東の綿作と綿織業地域の変容―埼玉県・茨城県の繊維工業を中心として)、歴史地理学会第七八回例会配布資料)。
- (21) 織物仲買商は、一八七二年には、四店であった(蕨市史編纂委員会ハ一九六七V『蕨市の歴史』二、七八四頁)。
- (22) この点は、すでに一八八九年、荷車の分布が、県内で最も多かったこと(中島義一ハ一九五九V『明治前期における埼玉県の交通』新地理七、三・四、一三頁)と符合する。
- (23) 一八九七年の所得税下調査簿によれば、反別ⅡN一、三八五・七二九反、S七九三・六一七反、地租ⅡN一、一五六・六九八円、S五九〇・〇七六円、軍債ⅡN六五〇円(他に整公一〇、四〇〇円)、Sなし、貸金ⅡN一〇、〇〇〇円、S二、〇〇〇円

円、Nの織物売上額五、〇〇〇円、Sの木綿業資本金二五、二三八円であった(18)一三一頁V。

(24) 綿織商の立地が全くみられないという点は、この三町の外に、前述の与野も同様である。

(25) 埼玉県(一九二二)『埼玉県誌』下、三八三―四頁には「越生町は旧くより生絹生産地の中心にして、婦女各自携へ来りて此市場に集り、他地方より来集せる商人に販売したり。明治十三年に至り始めて天幕を張り抽籤を以て買統商人の席を定むることとなり、売買開始を報するに第一鈴を以て各自の席に著き第二鈴を以て売買を実行したり。三十三年六月株式会社を組織して市場を設け、間口十三間奥行二十六間の家屋を建築し、内部を八十二に区画し、各地より参集する買統商人の望に依り適當の場所を貸付し、取引をなさしむ。爾来継続今日に至れり。生絹買統の爲、参集する商人は越生の商人の外、飯能・寄居・小川等の絹商最も多し(傍点は筆者)」とある。

(26) 筏宿に関連して、入間町誌編纂委員会(一九五五)『入間川町誌』は、次のように説明している。「飯能付近で組まれた継は、入間川(町)までが一日行程でここまでくると筏乗りは岸に筏をつないで上陸し宿をとった。大国神社前の甲子屋は当時筏宿として川を上下する人々になくなってならない一つであった。こうして筏乗りに憩の場を与えることのできたのも、以前から宿場町として貫録を示していたことが土台となったことであろうし、更にその理由を追究すれば町の位置が交通上の要地を占めていることに起因するであろう(三八九頁)」と。

(27) 明治以降の穀市、青物市場の再興については、(26)三六七―七三頁参照。

(28) 騎西だけは、東部の中に入り込んで分布する。

(29) 村本達郎(一九五五)「本庄市」日本地名事典一、七七三頁

(30) 中島義一(一九五八)「谷口集落の性格についての一考察——武州飯能を中心として——」新地理、六、三、一八五頁、
第二図

(31) (22)一二頁、第一図

(32) 近世以来の越ヶ谷宿は、宿場町機能をもつ大沢と商業都市的な越ヶ谷に分かれており、二〇世紀初頭においても、大沢には旅館・料理店・芸者屋が多く、越ヶ谷が米穀・肥料・荒物・呉服太物・質各商を中心とするのと、対しよ的であった(18)五一頁V。越ヶ谷と大沢を比較すると、一九〇二年の店舗総数は、前者二一六、後者八七、サービス業比率は、前者一一％、後者四五％であった(2)三三頁参照V。